

町長

ひとりごと

⑦

斉藤

讓



季節はいま、晩秋から

初冬へと移ろいはじめた。庭先に乱れ咲く菊の花が、一段と強い芳香を、辺一面に漂わせている。各地の菊祭も、そろそろ終りに近づいたようだ。

わが町でも、毎年老人クラブの菊花会の人達が、丹精こめた秀作を、役場庁舎前に展示し、訪れる人々の目を楽しませてくれている。いつものことながら、仮設の展示場をつくるときは、会員総出でとでも賑やかである。

町長室の窓越しに、そつと皆の様子を伺っている。と、どの顔も嬉々として輝やき、交わす言葉も弾んで、見ている私にもそのうれしさが伝わってくるようだ。一年間苦勞をし、手塩にかけて育ててきた「わが子」の晴れ舞台を作るのであるから、

それもそのはずだ。

▼菊づくりは、まさに子育てと同じだ。人間社会には、「親は無くても子は育つ」といったことばもあるが、

菊は親が無ければ育たない。菊に限らず花木は正直で、手を抜けばそれ相応の花をつけ、愛情をこめて手を入れれば、必ず見事な大輪の花を咲かせて、これに報いてくれるという。

隣家の齊藤 貢さんは、菊づくりの名人である。齊藤さんの姿をみると、そのことがよくわかる。土づくりから始まって、苗仕立て、そして管理とほとんど一年がかりの仕事だ。鳥の鳴かない日はあっても、

齊藤さんが菊づくりの手を休める日はない。一鉢の菊に向かいあって、静かに手を動かしている齊藤さんの姿を見る度に、私は、母親が幼子に湯浴みをさせている場面を連想する。もみじのような手や足をやさしく愛撫しながら、異なる



▲ 菊づくり名人・傍示戸の齊藤貢さん

くりに寄せて、次のような句を残している。

菊づくり

花見る時は陰の人

花に群がる見物客が、あれやこれやと自由勝手に振りまく批評を、会場の片隅で陰のように佇み、一見無表情を装いながら、そつと聞耳を立てている菊づくりの姿

が彷彿として浮かんでくる。いや、これは私ごととき未熟者の貧しい想像であり、菊をこよなく愛し、心をこめて菊づくりを打ちこんだ者にとつては、他人の放つ毀譽を超越し、こころ泰然としているのが真の姿であり、本当の陰の人なのであろう。

▼私達は、毀譽褒貶が渦巻く社会の中に、身を浮かべて生きている。この渦に巻きこまれまいと、必死にもがくのであるが、所詮人間は弱き動物であり、いつし

かこれに溺れかけたり、溺れたりしている者が多い。とはいえ、これに逆らい自分の目指す道を善地に突き進む人間もいる。その数は少ない。だが、この人達こそが、大は世界の歴史を動かす、小はそれぞれの分野の発展の幕を切り開いてきたことは、粉れもない事実である。反対に、薄っぺらな利欲にとらわれた人間は、信念や情熱をその場に合わせ無節操に曲げたり、消したりして常に周囲に迎合する。そのくせやたらと名譽や名声を欲しがると、その様は哀れとしかいようがない。

▼ところで、わが町には越川春樹先生という偉大な教育者がいる。偉大というより、真の教育者といったほうが適切かもしれない。先生は、安岡正篤師の高弟のお一人で、今日まで一貫して人間の生きる道、「人間教学」を説き続けてこられた。先生の行く先々の学校は、常に大きな反響を呼ぶ教育が実践され、輝かしい成果を挙げ、「越川春樹ここに有り」の名声が高まっ

た。しかし、その過程に於ては、幾多の困難と直面し、終始自らの信念を貫き、これを克服されてこられたのである。夙に先生は教育の荒廢に警鐘を鳴らし、「懐徳塾」を興して前途有為の青年達の教育にあたってこられた。この懐徳塾も、今年で開塾五十五周年を迎えて開塾した小さな灯火が、いまや全国各地へと静かに大きく燃え広がってきている。今日の教育の現状を思うとき、先生の炯眼には恐れ入るばかりである。強靱な精神力、確固たる教育哲学、老いて衰えを知らない教育への情熱、これこそが先生の真髓だと私は思っている。先生もまた陰の人である。この先生から手紙の中で、こんな言葉をいただいた。

当今の毀譽は畏るるに足らず後世の毀譽は畏るべし

この言葉はいま、私の腹の中にどっかりと居座っている。